



# The three arrows

校長通信

No. 6

H29. 10. 02

10月に入り朝晩だいぶ涼しくなり、秋もだいぶ深まりつつあると感じます。食欲の秋、芸術の秋など「〇〇の秋」というように、「秋」をつかった形容は多くありますが、今回は「文化の秋」として、文化祭のキャッチフレーズを題材にいろいろ考えてみましょう。

## ◇秋田県高等学校総合文化祭キャッチフレーズから

### ～ 繋がる想像の樹 広がる創造の波 ～

これは今年の秋田県高等学校総合文化祭のキャッチフレーズですが、これを発案したのは本校3Bの茂木花蓮さんです。「想像」と「創造」という同じ読みでも異なる意味の語句「同音異義語」を使って作られたこのキャッチフレーズからは、茂木さんの大変瑞々しい感性が感じられます。

さて、「想像する：imagine」と聞く、と私は真っ先にJohn Lennonの「Imagine」を思い出します。

「想像してごらん。天国のない世界を。足下に地獄はなく、頭の上には青空だけ。

国境も、殺す理由も、宗教もない。平和の中で生きている世界を想像してごらん。」

と歌うこの曲によってベトナム戦争が終わり、多くの人の命が救われたと言われています。折しも、さる国の核開発を巡って国際的な緊張が高まっています。そうした国々の指導者達にこそ、じっくり聴いて、平和な世界を創造してもらいたいと思える曲です。

もう一つの「創造する：Create」について。10月はノーベル賞受賞者の発表があり、今年は2日の医学・生理学賞を皮切りに9日の経済学賞（文学賞は後日発表とのこと）まで、他に物理・化学・平和・経済合わせて6つの賞が発表されます。昨年は「オートファジー」の仕組みを解明した大隅良典東工大栄誉教授が医学・生理学賞を受賞しました。青色発光ダイオードやiPs細胞のようにすぐに成果が見えるような研究でなく、この研究をベースにして様々な病気の治療薬や治療法の研究に役立つという基礎研究が認められたと言うことが話題になりました。大隅栄誉教授は「小さいことでも世界で初めてという『わくわく感』が科学の醍醐味だ」と話しています。新たな領域を創造するには、この「わくわく感」が大事なようです。

毎年この時期になると、作家の村上春樹さんが文学賞を受賞するかどうか大きな話題となります。秋田県出身者では、旧東由利町出身の遠藤章・東京農工大特別栄誉教授も毎年候補に挙げられています。遠藤氏は血中コレステロール値を下げる治療薬「スタチン」の原形の物質を発見しました。スタチンは体内でコレステロールを作る酵素の働きを阻害することから、世界中で100カ国以上約4000万人が服用。多くの人命を救った抗生物質に続く「第2のペニシリン」と呼ばれます。米国最高とされる医学賞ラスカー賞や、医学の分野で世界的な発見や貢献をした研究者に贈られるガードナー国際賞も今年受賞しました。ノーベル賞は「研究の第一発見者を評価する傾向」にあるので、身近な所からノーベル賞受賞者が出るという快挙を想像するとわくわくしてきません。

## ◇矢高祭テーマ「一笑懸命」から

今月13日・14日には矢高祭が開催されます。テーマ「一笑懸命」について発案者の3A佐藤大希君は、「一生懸命」の漢字を「生→笑」と「命→明」に変えて、笑顔が絶えない文化祭にしたいという思いを込めて作ったと述べています。

ところで「一生懸命」、「一所懸命」どちらが正しいのでしょうか？NHK放送文化研究所HPには次のように書かれていました。

「一所懸命」は、「昔、武士が賜った『一か所』の領地を命がけで守り、それを生活の頼りにして生きたこと」に由来したことばです。これが「物事を命がけでやる」という意味に転じて、「一生懸命」と書かれるようになりました。どちらを使っても良いのですが、NHKの放送では「一生懸命」（いっしょうけんめい）と読んでいます。

皆さんには、テーマのような「笑顔が絶えない文化祭」となるよう、みんなで協力して準備を進めていって欲しいと思います。

